

## アンサンブルブリランテ 第12回室内楽コンサート

10月16日、日曜日、昼前の小雨の後の秋晴れの日差しが木の葉の色づきを一段と鮮やかに染める中、ノバイ市の美しい教会にクラシックメロディーが流れました。

2000年のミレニアムに開始したアンサンブル・ブリランテの年次室内楽コンサートも、今回で12回目を迎えました。今回はフルートと弦楽のアンサンブルを中心としたプログラム構成。

芸術の秋、音楽を家族づれやグループで楽しみたいと思う110名を超える方々で会場はにぎわい、なかには、多忙なスケジュールをやりくりして駆けつけていただいたリピーターの方々も多く、熱心な聴衆の皆様の熱気が演奏者全員のアドレナリンレベルをいやがおうにも120%アップしてくれました。

前半はソロ演奏中心のプログラム。フルートとピアノの演奏によるエルガーの『愛の挨拶』で幕があがり、ドボルザークの『ソナチネ』全4楽章がつづきました。2番手はヴァイオリニストのアン・ワラスキー氏によるフォーレの『夢の後で』とクライスラー作曲の『プニャーニの様式による前奏曲とアレグロ』をヴァイオリンの甘美な音色と確実な弓さばきで演奏。前半の最後はサラサーテの『チゴイネルワイゼン』。原曲はバイオリン曲です。ときには激しくまた切ないさまざまな音色と華麗なテクニックを要する難曲をフルートで挑戦しました。

インターミッションをはさみ後半はフルートと弦楽によるアンサンブル。今回はこれまでより一層多数の演奏者による濃厚で多様な音色の演奏を目指しました。

最初はヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトが作曲した全部で4曲残されているフルート四重奏曲のうちもっとも有名な第1番。バイオリン・ビオラ・チェロとフルートが織り上げるロココ形式の曲。伝統を生かしつつも、各所に新しい響きのアイデアを織り交ぜ颯爽と全3楽章が演奏されました。

最後はピアノも加わり、「音楽の父」ヨハン・ゼバスティアン・バッハ作曲の『管弦楽組曲第2番』より4曲を演奏。4曲からなる『管弦楽組曲』はブランデンブルク協奏曲と並ぶバッハの代表的管弦楽作品の一つで、当時の様々な舞曲や宮廷音楽の集大成といえます。管弦楽組曲第2番はフルートがソロ的な活躍をする、独奏協奏曲に近い形式を取ります。フィナーレのバディネリは曲のスピード感と難しさからポロネーズと並び独奏曲として単独で演奏されることが多い曲でもあります。ミニオーケストラ的な演奏効果も交えながらプログラムの幕を閉じました。

アンコールは、教会のシャスター音楽ディレクターの即興指揮のもと、聴衆全員の手拍子も交えた、ヨハン・シュトラウスの「ラデツキー行進曲」。スタンディングオベーションのなか、コンサートの幕を閉じました。

最後に皆さんからいただいた感想からいくつかを列挙したいと思います。

「管弦楽器のコラボレーションにうっとり聞き入りました。」

「今回はより一層多数の演奏者による濃厚な演奏を楽しませていただきました。」

「管弦の各楽器が互いに相手を一段と引き立て、楽しく鑑賞させて頂きました」

「芸術の秋にゆっくりとクラシック音楽がきけるのは本当にぜひいたくなあとおもいながらきかせていただきました。」

「子どもたちもフルートや弦楽器の演奏を間近で見ることができ、その細やかな指使いに驚いておりました。大変楽しい時間を家族で過ごすことができました。」

「馴染の深い曲もあり、また生演奏の迫力もすばらしく、楽しい時間を過ごすことができました。」

「秋のひと時、素敵な音楽に包まれて過ごす事ができたこと、嬉しく思っております。」

「オールクラシックで素敵でした。」

美しい、板張りのキャシードラル天井という音響的にもたいへんすばらしい教会で、サロンコンサートの的な雰囲気重視した演奏会を今後も続けていきたいと思えます。また、今回の成功をもとに今後発展的に室内管弦楽団を作っていきたいと夢は限りなくひろがっていきます。

これまで我々の演奏活動を支えていただいた、ヘンダーソン牧師を中心とした教会関係者、熱心な聴衆・サポーターの方々に心より御礼を申し上げます。

アンサンブル・ブリランテ  
小西孝和



(写真提供 鈴木啓祐)